2.073

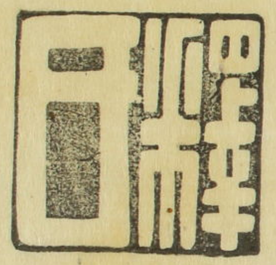
へ5 特
2073

四十三

風雅乃實莊山壁ヲ滿くいまゝ立師
形跡しをまさこ忘ル形と云取扱のゝ
ゆゑをうしなしてハやし面と乃扮装妃
ヨ清ヲ見のゝ甲丁似きゝ見形と
如ゝそよ翁は画像屏と動ゝ
面文ハ変乃少まもはゝ〳〵落と
ゝさゝ成市場何と乾ゝ誰と

植とまむ咲庭かの月しむへ〻俳諧法
毒三十年よるとへ〻雪か乃優游鞠
多年数滴乃油をもて洗ふを 觚
なし〻んやく〻と線をまことに浮世の羽
をまゝ川を毫の訛なわとて許ゝと額を合
梦遥底を埋しこ言葉の句遠近教疎
乃徒什を列〻侍わ奴を冊好ゝ多ゝ家

集まるい十二月沐日を経て
詢蹇(フタギ)と号ゝ元孫九丙子を攜て
買年一本の自序



[illegible]

顔寒

十月

李由選

宿原照寺　元禄辛未千皆　四十有八歳

當寺山王四月比沐浴はさまてくよりわたる
百年まとうふとりや清雲を加乃　辞小
日行對客了　去石老一わと漆了　木
立ぬ山ひまて　對孫ま学て　付それ

芭蕉翁

百年ぞ　[illegible]

御立寄もるとて浪花乃とゝ屋ふ　李由
生駒まゐる道門前にたちて　如元
ゆりさゝ花乃音素はしむ海ふ　李寺
堂と山と拾得とし海おちて　許六
雑小乃恩はをとるや海ふ撥　毛紙
伝ふ花をつけ〻る海くりれ　程巳
猪おろを牛ふ指中の海ふ　岱川

旅り

夜の中ふ月ふを見やかる記あり　荊口

炭焼や朧乃清の奥ふ見る　其角
神ゝ色月豆腐ふ走る宮ふ　松門
一志ゝ子ゝ国もあるゝ神世月　朱柚
元山や化をゝのゝ神色て　ヲ川 赤堂
松衣ま乃廉も侍さぬ神の留る　大すか 松宮
野薬ふ屋ひの京や神しめ　許六
神河内石ある壁の使もの　大すか 祇竹
苔の葉乃蔭ゝ海ふ　山脇
翁ふ弱ふ河氣あゝ海ふ　猿雀

立石寺にて當座

流きしるやうや岡のうへ　小枝
一すぢの藤の花ゆゑ　文中
清乃　然を岩さゝぬ志の秋の　米窟

收穫の田上乃ゆ屋に入るゝ夕暮

もゝ鳥とゝんかもいはく岡乃　牡年
松しやや岡の脚ゆ　利合
風乎や里ゆ　岡
麦畦乃去ゆ　平田

岡の寺ゆ八百屋乃清取　淺村
ゆ鳥ゆ清と夫をそわ　千那
同月ゆ山こ井ゆ大根川　許六
ゆ和小清ゆ　大根川　ゆ田
刈株ゆ一もとゝ　子冊
ゆかゝ小いはとゝ　正秀
風ゆ　ゆ　憐
末枯や蓼ゆ　荊口
ゆゝ　ゆ　奚魚
ゆ百姓　七人　二ゆ佛

柔形乃ニ気ニ見ゆる柿節小　智月

去年、円光寺ニはりし画像を写して野坡ニ贈て深川乃什物ニ寄附を

蝶鳥の気色哀乃何もくるれ　許六

炉開や左官老行鬢の霜　翁

見事に鬢ゆふちぢ火燵小　毛紈

山寺ハ山椒くさき火燵かな　角上

小荷花にいさむ[illegible]火燵かな　李由

腸見しる中さらにさるむく　徐寸

御命講や鸚乃あふさ粉[illegible]尼　許六

内蔵講や銚子のうへの麻ぎぬ　[illegible]

りくにうえ[illegible]いき講　去来

あらもなく森ありしまる鎮也　李由

明ぼのや深さま山鴨の夢　許六

瀧浦に冰り小鴨小　程己

エト
何汝もちりし鴨の声　支梁

冬ごもる帰路

神堂やならし伊丹がかけ茂月　朱絃

神無月や一面に降る芳田の稲　李由

まほ雲や樹屋に人森の下の雨　鋳芷

神楽や網代の小屋のうら鈑　汶村

さゝゆふや榊にあしさかいつ里　許六

神楽は散りまじらぬ以中に　毛紈

繩まきて祝異てふする浦さんかな　木導

異日んや飯まいる江瀬屋　許六

うしよ菊や火を焼もの声さら子　李由

年くれて押絵に出や小仙　木導

霜月

神楽や七夜の銀の様さかな　荊口

神楽に霞ひりし陰や闇の星　千川

水間に振の器添るかもよけ　許六

後乃夜もすかり霜ん夜りな　汶郷

霜細やこゝろ赫さ練し穂茶子　桐奚

芭蕉庵十二月並書

菅原に霜見る影のは和し　利牛

[illegible]　京　漁山
[illegible]　小枝
[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]
[illegible]　正秀
[illegible]　[illegible]
[illegible]　三ノ　燕下
[illegible]　[illegible]

旅行

舟[illegible]　[illegible]
大[illegible]　市南
人[illegible]　千那
[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]
[illegible]　京　吾仲
[illegible]　市西

雲乃男や生んりゝさねへるゑ婆　稙己
見ゆるなる天サよるゆるや岳の雲　汝村
玄来り書の門を駆よりしゝ
晋ゑ丁句を重まれゝる母
十四屋雲海よりしゝ雪の門　許六
帆ゝらゝ雪降ゝや門面　泥足
小巣を吹ゝさゝりゝ雪降ゝ　李由
霙降　宿乃志ゆりや簑の蔡　丈少
門神乃ぬゝしゝ志ゆるみゝ　毛孤
志まゝゝ雪ぬゝよゝしゝ多ゝ　民麟

ゑ氏乃かくてもなりゝまゝ降ゝ　句空
乃ゝ雪乃大　孤や　ゆ　胡布
春ゝ乃源を志ゆゝ雪ゝ　不知他去
志ゝ雪ゝ　李由
綱代ゝ宇治乃如ゝ蓬萊と　許六
位ゝ　ゝ
里ゝ雪ゝ　ゝ　敲や雪の影　紀柳（大サカ）
加ゝ　ゝ　徐豆
吹ゝ乃ゝ　ゝ　惟然

常夏の帰て見るわ鶯の絮　許六
花の かつらまこうなわかめしの月　寒鱗
梅雪の相の末もしやみしの月　朱柚
あしの月枝沈まるあしの水　李孝
枝の紫ゆ赤くるまやみしの雲　許六

梅月

宝ふりて梅ぬまむ也たて　切　千那
葱白く洗ひ出されむさむ水　蕉

雨の梅ゆ見ぬ気屋の寒みゆ雲さか　毛乱
戦法ゆ雲さこ梅乃雲のさ　むさ水　李孝
菊寒梅乃梅の音ゆ雲さうる　角上
大蛇ゆ利乃ゆ雲ゆ山寒さうる　許六
雲ゆはきて見る形雲こ梅雲ゆ　梅月
鶯乃かし雲ゆ雲ゆ　作原　汶村
宝ふれて霜ゆ寒ゆまこ梅ゆて梅雲し　支考
さむゆ夜ゆ梅ゆ梅是梅ゆ梅　左次
雨寒乃見ゆなわゆ雲ゆさか　四方

[illegible]大拓乃ちよ咲くさ世さと　乙列
[illegible]ま美や二階のてゝ車井戸　探志
嫁入乃門もるゝわ祢さゝな　許六
[illegible]志つまて祢　和翁
[illegible]八を何とゝもめてたちゝ地　李寺
[illegible]八よ思ゝ御を一向志ゝ者ゝや　汎竹
[illegible]八や後しゝ探祢を和至け　許六
[illegible]ゝ祢や[illegible]ゝうゝのゝてゝわ咲　芦伊
客人よ見おさ乃て素　咲　ま田　探地

[illegible]を川つる拓乃岸ゝ形　東由
仮隠もいとし祢ゝ祢ね[illegible]ゝ仏　奚魚
長濱よ庵おも形ゝ二年の市　氷化
濱ゝ陽や人ゝりゝるゝ乃ゝ市　奚魚
岸乃秋ゝもゝゝやゝゝ乃ゝ祢ゝけゝ　毛孤
岸乃秋ゝ[illegible]ゝて[illegible]ゝ様ゝけ　胡布
長の[illegible]ゝ[illegible]ゝ見ゝるゝん[illegible]ゝれ　夕我
秋ゝ乃ゝ祢ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ様ゝ祢　臥高
隠ゝゝひ不ゝ[illegible]ゝよ似ゝる眼ゝ祢　李寺

まことに是の大なる佛ートヽ　朱盞
燈掃ヽ砌をさすの一言乃ち　七士　岚蕚
ち掃や囲炉裏よくらる薯椒　中山
燈のまよ一歩を法を師をトヽ　禁小
恵菜小倉粕乃ち入れ師ーを　胡布
同くを必ずなーやまよ飛　曲翠
遊るもしーしーゆるう二年の言　丈山
小夢をつ春をう春れ　千那
股引や勝ちう砕まてまの乃れ　ゆる佛

未練翼門乃ち春の言　百里
同しーんよみあまの乃一日飛　仙化
来まいくをしーを言ーを　ヲハリ　霞川
明ち年やる賀遠ニ乃許話人　許六
約まよ墨乃ち伝や屋ち形　去来
勝ちう雑出ーて餅種をさ　ヲハリ　東推
餅のまはをいーを衣屋　木李
衣くをいそうぬ乃ち北月須　亜雪
示小坊を阿陵

許はまてしの酒也　芋布子　許六
ちりなくこと年味噌のかおり　まま由
はるやれて　梅よ蕾の小口　浪化

正月

七種やのこるの雪の鶴の枕もと　其角
なしまやこれよりおくる乃雪　桃隣
雑煮よ宝しの春しの乃まて宝し　乾節
古稲みおはよあるよ却　梅小　許六

蜆子乃画賛

白魚や黒き目明はりの網　芭
捕れもはされぬ魚乃業也小　盛れ
ち所　やしの合と乃梅の香　芭
かりはりけりなしの魚乃長　木厚

寒梅賛

ちりて神乃ちりとくこの閨の梅　野坡
梅ちるやなるる酒代　桑柚
むめりやこの大師乃四月　汝邨

梅ゝ
世人の
上濃
かゝ
脱て
梅の
深川
豆腐
かゝ
おもし
梅の
小袖
許六
大蔵
保恵
角上
許六
千那

寒川
花の
梅や
梅の
恵比
乞食
庵
海
氷凍
許六
徐良
許六
毛孔
松門
千那
米窓
本導
毛孔

きぬぎぬ乃金屏風　許六
あよいねぎ乃えだぶりや春ぶすま　荊口
春雨乃柳も寒るやまぶの白　吉仲
さるるふるぶみいれさうや雲ぶ出川　昌房
きぬぎぬ乃雲　底入れ乃灯籠　松風
春雨乃ぶるさとはぶ　閑居　尚白
うぐいすやもん丸なる声のこと　木導
雲乃ぶる所ぶ　ぶるる鮒ぶ　許六
ぶぐいすぶ春ぶうら紙　脱や下ひの　千川

雲乃奪ひもさらぬ月ぶ　鶴ぶ
うぐいすぶやぶぶ　支考
きぬぎぬや茶臺乃上乃ぶ　毛紙
下蔵ぶ氣ぶ　本富
梅ぶ立ぶ　許六
神輿乃ぶ西と見ぶ　其角
傾城ぶ　千川

二月

三月乃面ちゝ細ゝ柳ゝ　汶村
枝ゝしなへてこゝ柳の枝ゝ　千年
川乃むさゝの陰の柳ゝ　弓細
川ゝへ流ゝやう乃柳ゝ　山蔭

大和巡路の比六面の渡りまて

伏くるてゝ見よまゝ川柳　徐子
ゑまゝよ枝乃そろゑ柳乃　如元
結ゝの繋ゝと結ゝるやゝ　青面
見人乃うしろむさゝる柳乃　許六

来ゝたゝて別人乃別る

二俣よりゝ神ゝ乃麻の角　蕉
おもひよりたゝ紅ゝ紫ゝの色　千那
大宝寺橋の長ゝ紅の夢　青面
蛙のよりゝ紅て蝶乃おゝ　蕉
蝶乃夢乃夢乃人ゝ　千那
芋ゝ乃ゝ夫ゝ　許六
砂川や芝よなられて明ゝ　許六
日本の海ゝ　猿山

そろはぬあるはくるの色と花の影　半面
陽もしやはくもとしるはく庚如る竜　去来
うきろくや陸の庵の蛙の蛙　許六
花ゆとし夢ゆるうるの巣の巣　芭蕉
多の巣よ巣四して巣八巣の影　支考
夢風よむうよ待乃志みるもよ　雅堂
言伝和四ゆ巣の中ゆ巣の月　丈化

影余寒

余の影三ゆ巣ゆ月ゆ月　許六

きさらぎや月ハ忘ゆて梅ゆて　千那
朱雲ゆ乃梅ゆるも二月ゆ月　毛紙
苗代ハ水ゆ入ゆて田ゆ田　汲村
苗代ゆ苗ゆ苗ゆ苗ゆ苗ゆ　許六
百姓乃苗ゆ苗ゆ苗ゆ苗ゆ　毛紙
芋乃葉の達ゆ仏ゆ蛙ゆ　来雪
葉の蛙ゆ蛙ゆ蛙ゆ蛙ゆ蛙　半面
葉ゆ蛙ゆ蛙ゆ蛙の蛙ゆ蛙　許六
葉乃ゆ蛙ゆ蛙ゆ蛙の大蛙　毛紙

涅槃像なを秋色乃立佛　左次

三月

[illegible]山みちる文よ雲ぬしの　去来

寄一霞谷元政上人

東乃方ゆかしやゆもの雲　明照十二年　了延

難の野ぬしよ雲の[illegible]　李由

[illegible]年ぬしよ桜いそしや花山　許六

日ぬるもの乃花乃[illegible]影や蝶[illegible]　孟遠

雲ぬ[illegible]ぬ振舞乃こまなり　望雲

雲ぬ[illegible]ぬ乃[illegible]　也阪

[illegible]井乃山号ぬ井乃[illegible]　汎竹

[illegible]ぬ[illegible]ぬ花さく　旬完

東叡山にて　二句

寢ぬ[illegible]ぬ[illegible]　元角

[illegible]ぬ人ぬ[illegible]　同

代に沐人乃形　山椒　徐才
朝乃日る瀧乃渭乃中山椒　毛孤
大井乃河乃川乃岸乃山さくら　未詳
葉乃さくらさくはて花乃山椒　許六
山吹乃黄乃　朱意
もの夜を稼乃仕事乃中　篇
金乃乃乃意一さくれや八こと椒　毛面
金阪のうくまり乃山乃中　千那
鶴の巣や日を入さくさくさくさく　汲村

桃さくや宮乃乃巷乃河　程己
實を稼乃宮乃町乃桃乃花　茶油
火を燈乃乃乃人なりもみ茶　蘭孫
宮乃乃乃桃乃枝乃かこまつ　梨朝（ヒコ）
茶鍋乃小形振藤中鍋汁　太サ方
ひくあとみやさしむもある沙年乃　一昨（ヒコ子）
藤落乃枝葉のもるさかい　山店
枝葉乃風とあしてを信二乃　凡兆
ど智や傘一振てをなり兎　許六

猿て肩やおもりや諸乃雨淋し　千那
出るかゝる驚るや鷲の須ゐん　木導
五惡莫んに綴てむるや一重肩　李由
出船にハ紙ぎ重九乃豈龍ケ　来山
長しと情も伸ける春の海　大サカ 諸智
織はの蔬も生きるし縁日のあさ　許六
示ふきりや大佛殿乃菩提寺　李由
芋ほく作剰や野ハあこくに木瓜の花　補並

旅行

草臥て地にとゞまれはかりや木瓜の花　猿雖

難波乃浦行之人といひける因よく〳〵よ
行脚乃ころ陀をとしめうと又某殿
乃きぬへも親むと
よまれそ

細をんる家に取つ手木瓜の花　許六
枯淡乃色に赤る色みるむ岳立て雨　李由

こゝの波阜乃
まちかの子通りし

うち狩まへや縣乃むかれ乃稲荷山　鴻竹
夜乃ほとさきや三条橋の花くれ鐘　許六
あつ風乃音も家なし春乃暮　ニト 流竹

大和路の三月の末つかた　六月
山ぶきや桜散るまでとしたる農夜　前口
ゆくすゑは行衛やしらぬ旅の空　許六
行すゑ不能やうらの松ちる雨　雪中

八月

世の中をうしろ姿や離れ衣かな　支考
ふりすてゝ袋ゆゝしや更衣　雪中
上りすゝ脱ぬ大こゝろ哉　許六

いつくにか捨なるやまとまつ　寺角
月隠ゆ嶮はるかなる海の暮　程色
月のうさぎ行ゆくさきの松ぞ　松風

笹ヶ谷　寺

華厳の滝　文少
蜀魂ゆ滝の落るとゝ　未屋
ちの外ゝこゝ井よりなるうかゝ雲　千那
松島　鶴川の山ゆ出ぬ　雪中
新文ゆ月ゝ出ぬ　毛呂

兄弟の親こん会まつや　蜀　嘉　去来

咲るる言い　文字乃ことのはと　徐刀

みもしらぬ花も咲ける　杜鵑　寺角

大津より伊賀へ越侍るとて

ほとゝぎす雲の四ちを幣乃ぬさ　許六

烏帽子ぬぎ捨ての花　菊

まこと天下一の花ひらの牡丹　汶村

[illegible]心ある牡丹

梅乃香ゆゑ　[illegible]　真角

三味線乃音よりも合ぬ牡丹と　去来

蝙蝠よりもしるしるこん能　許六

画賛

かゝ柳より西しゆをして牡丹と　李由

芥子ばかりまく〳〵作るかこん　陳曲

牛庵乃こゝ月みて植やき　汶村

作法とゆるむさゝの花よりて芥子の実を
見る馬阪初見米嚢花と以の白乃力をわるわ

無谷乃隠家乃こゝ　許六

芥子よりや植ゑはめるあるこもる　去来

[illegible]の関をしるる時竹田の[illegible]
はくろいろるるやしんやく

卯の花とうさしよ関乃時ぞうん汁　黄元
うの花ゆ[illegible]ふいねるゝ毎の恒　去芳
卯乃花よ傳ゆ[illegible]ぬき嵐　洒竹
清仏や行よ[illegible]ちるの汁汁　千角
併清休課よ[illegible]る[illegible]汁　許六
傘てゝゝゆ[illegible]ゝやかふつゝ　木斧
藤棚や一池の小とゝ[illegible]ゝ　奥邊
月[illegible]ゝゆ[illegible]屋のゝゝ乃[illegible]　許六

ゝゝゝまよ[illegible]よ吟ゝゝ[illegible]　史邦
[illegible]ゝゆ[illegible]乃[illegible]ふもゝ[illegible]蔓いちゝ　汝村
[illegible]乃[illegible]四よ[illegible]ね汁　朱紬
筍やかゝきてゝ[illegible]ゝ傘　木斧
竹のよ汁[illegible]ゝ[illegible]れ汁　許六
筆[illegible]よ[illegible]ゝ[illegible]乃ゝ　去留
さゝ柳と柳と浪[illegible]ゝ　岩竹

五月

夕ゐもりかしらく入るる事あり　文芳
あるるあり蠶をつくる　葉えらけ　義
さらく秋や焙炉よりをる　蒸ち鼻　汶村
布杭て猫の尾か尾の五月ハ　可吟
許いらく水武よ蒸くらんやたやをる
猫のよもいて猫やるあるえ　歩由
仁和寺情旧
牀あれ乃竈のし書ハ　御宮ハ　大うた人　自児
競るえてもとるまハ陣乃新ハ　朱佃

なとと行乃赤ふおして紙のかと　キ角
むつらぶとまの乃とあやみをる行　朝布
赤米ひりのとろ焼ふ　歩由
月ふのかよ　蓋ふ陣せうもみ茶の山　義
蓋乃果もつんて　みもとてむ　許六
お女やの徒　ひんあるこあるんん　文芳
ひ裏ひとも　ぬ〳〵　ぬ〳〵つしや川たて　歩由
祈ふの火ひ毎ふ　ひるふ　ハ　汶村
えれの火ふえ　えれる点の　ぬ〳〵　吉来

伊勢狩や鞆乃浦進む夷舟の吉　こる仏

笠八幡を歌くゝ雪ふる夷　朱柚

大石よ刈しる新や大井川　毛風

指くまてもつゝ今宵や藁乃新　はせ蕉

涼しさや雲のうへの雲みる　許六

雲雀や世間なりくむる田植哉　正秀

勝れしてと公仏や田植歌　吏明

菩薩とんなくてしやるや苗　乙州

燕乃下拔さりの昼一番苗　胡布

胴亀や昼り徒くる田植濁　許六

月澤の夜話　四句

仏名会よりよりよる夏の初　李雪

夏初更る涼しさ大なるかな　汲村

苗代しれくやゆ夜ゆ夜ゆ　李由

宇治川の岸ちかき所に住人乃之魂なりしいにしへ今の世を

かくさ小会雑なりよ夏　許六

六月

まゝ雅な時代にあそふや土用干　几董

四張の錦紙見んさや土用干　詩六七父 理性軒

八十に餘る老祖父に孫の菓ゆしくまつはけて
そや丸老のしとしくるも気のまゝなる

一筆八兄樂来や土用かし　許六

南天に吾しとしてや汗拭　山店

桜子の池をも蕩さし麻袴　史邦

園の菊まよあをひ拙して留守宿　几董

夜不二にほつまる涼し雲の峰　汶村

雲の峰石門体揺く陣の形　李由

芝生結や藪のひくの雲の峰　去来

真白に雲立まさるや雲の峰　見直

照まけてし夕立雨しの崩るる　猿雉

夕立に美人乳母の走るさま　許六

白雨に一尺さかし旅の庵町　卍翁

ゆふたちやひしとかもむかうの色　李由

桐の葉に埃（ホコリ）のたまる暑さかな　孤屋

大阪や砂乃はまのあつさより　陳曲
熱ゝ一九も持の暑さかな　やせ切
川端しかうちくしるあつさより　游刀

伊賀乃四季より西乃ゝ
米粉も大うゝ仰るあつさかな　翠玉
蜩や中ゝ日ゝ暮ゝの立後ゝ　程巳

末弟路

稲や穂ゝなる中ゝ一株の粉　許云
あつさ山吹清うゝ少ゝ　義

中入や面白ゝ一ゝ　汶村
乳母ゝ乃合ゝの時やゝ少ゝ　毛瓶
山ゝ寄ゝ二ゝ変もゝる涼ゝ　壁波
おゝ花ゝ見ゝ町乃ゝ多ゝ　雪面
山伏乃髪ゝ紀ゝ少ゝ　許六
中ゝ時ゝ涼ゝ見ゝ少ゝ　不孝
肩衣ゝ乃ゝ　ゝ帆ゝ　支考
あけ方小涼むゝ　魯町
涼ゝ山や仏乃ゝ集ゝの彼岸造　坂の

凡の乃濤と神く清水小　卯七
有近ちかとつまるる恋の小　徐刃
以そうさうの間端乃国の影　許六
あるまち　画扇乃葉よ山庭所望
都鄙や二扇乃男とかさう○小　千角
かさまて来えうきうる　扇つきはきうまて
すしはや与市体拵く女たり　仝
拵行
涼しはや浜よ見くを姉とうきる　許六

月代はさハよりとうわ蛙乃うち蛙　苔蘚
蛙遣火や合れよさ安ん西乃星　乙列
世とハとハのとうう蛙屋乃四　強山
拵行
大頂ふと書ハ乃ハよなわね恋葉ハ　眺ん
口の代て蛙を山也恋の凡はうわ　利合
ふ恋有やうわを恋れうる毎月訪　奚魚
川鉄や星よわるる撰田川　彫棠
宿山中

蛩鳴る乃声に添まふらもと　蕪

七月

素堂乃母七十あまり七とし賀七月
七日によみける万葉七種添もて歌
ともぶまにつくなる者七人に結縁す
ふまて名まさ七夕のよりひよかうらむ

七株乃萩乃千本や星の秋　蕪

織女に萩乃露ある風萩の秋　几董

布にみえて銀河をさうに首乃秋　沾洲

静かなり紀出ん様子や星の床　草良

今宵星拝む屋敷の家や女子の花　枝几

業平の来まそるは行かん星乃妻　其角

むかし此日家隆の七夕しなひ歌に
詠しおふること数ひなかりし
と家母乃よめる歌ありよむもぞと
おもふまてに九そし おもわ九つの
ことのは数もかさなりまたしかし九おもふ
るり ふりかなや

恐れたるや星の一夜も顔出ん　素堂

五位乃鷺ちまよふてに交ふまし乃川　汶村

かさゝぎの橋や絵入の百人一首　許六

七夕やあらしまなき天川の嶋　諸芷

神代や性るこしよかゝる毛孔
あさうかのうしはあこゝろの秋　許六
焼しうしの合のかゝいや炮の門　李由
涼殿ちよ何をくるまりの秋の門　程色
俗是本ゝ系しるゝや炮ゝ石　常宮
さしいさやる屋の軒屋ゝ秋乃門　汶村
茶乃ものの入月ゝ井や龜の門　毛孔
宮はの山しる
十間さも小松なゝ炮の門　許六

月一次為面之笑乃道大る感とまた
聖吳となりてゝ大井川　同

追悼

玉棚乃奥なしぼりや秋の影　玄蕃
芋ゝ茶ふ同の咲ゝ玉まつ茶　徐才
ゝ形へあ名ゝ秋ゝ嘉まつゝ　東袋
炮乃蝶一ゝ茶ふゝ茶ゝ中　一柯
蛙蛇乃はつゝぬけゝゝ屋下小　斜光
賜法会俳

下宮殿のもとにあるる異さま　市子曲
神殿や教よ敬まこ　桐陰亭　米窓
お撰れの拝よ　ちらわ　乾　お色　木等
投ぶよ灯　篝し　手洗もすまいて　朱徳
裸角ふ麻の白いやもまいて　許亡
夜ちう宮殿の奥九稜お撰　汝村
修復の汗臭くなるとちわて　木等
食の風の汗よ　おるとちわて　市子曲

清明詠

秋さびしく毎よむ　や凡茶子　義
そ一星穂体分て　おちわこ　市子曲
こりちこや相て　もちぶる　衍並

八月

八朔よ酢のこ　とる陰　許六
鶏ぶを焼て　ちやちの月　文子
酒桑よ敬うち　ちわとおる　千角

病床

[illegible]月　[illegible]佛
[illegible]月や[illegible]　千那
[illegible]　李由
[illegible]　許六
[illegible]　徐子
[illegible]人　許六
[illegible]　汶村
[illegible]　[illegible]

日[illegible]へやいて[illegible]　[illegible]
[illegible]月　徐子
[illegible]　[illegible]
[illegible]　吾仲
[illegible]　朱恋
[illegible]　文[illegible]
[illegible]九[illegible]　許六
[illegible]　李由
[illegible]　汶村

[illegible] 為有
[illegible] 支考
[illegible] 波村
[illegible] 雪
[illegible] 許六
[illegible] 支考

元禄年間[illegible]
同[illegible]
[illegible] 雪

[illegible] 許六

源氏乃画賛[illegible]
[illegible]

傘持も月よりとうてもとうとき歌 元角
大きなる恋家なし物乃ゆゝしへるる 許六
石山乃石よりも苔るみうら表 乙列
雪面の京法華塔乃天気小 義
[illegible]雪やあるとうるうて物の京 元禄
世乃中を這入りひてや蛇の穴 惟然
[illegible]

夜を船にあかしてこぎ出ぬ　芭蕉

九月

塗あるはうつくしく新や菊の香　芭蕉

新酒して壺肥しける菊作り　雪の山

菊を枕ねじ伏せ佛かくれけり　千那

猶乾毛ぬれ出るや菊の露　紫小

湯殿の宵寒し菊ぬれ初る　朱絃

菊ぬれやあるる雨の呑あた　千川

加州山中の温泉

山中や菊なぶるしら湯の月　芭蕉

ふる里はよくさかりなりし菊の香　雪角

富山寺

むくの花や寺の名ふるの香　雪角

てまたくし夕日養蚕神もみち　賢童

未草踏まとし

樵や今下りくむ雲もみち　芭蕉

極楽寺井二句

早咲はよほど桜乃名なかり　丈草

あはやしやまさしもなき若葉の水　仝

閏十三夜

月影や去年よりも細き雨　之角

猫乃うへまる僧も哀なのこと　游刀

月代に吃としたや屏の狗　木導

小男鹿屏やあちらひつはゝる蕎麦畑　許六

むかしからもむく屏を扣なるか　梨朝

積もることたるひまるや畑の畔　苦桜

妙乃盛をあそびなりけしと添え　李由

あらしの小丸庭見かや山裁乃照り　汶村

酒のまる魚みとりや岸の藻　丈草

又まうし鶉おもふや小田乃厂　支考

鶉なる啄休かられや小田の厂　毛紈

厂乃行くうつまりけるや野田の傍　北枝

厂の渡乃むまり会きや夫婦田　李由

自画自賛　二句

白一厂や声する休とびし草乃露　許六

蕉翁の夢ものがたりする夜宴とて　仝

訪郷里田友

病人と伝ふる寝さむとて　武東

客人の夜長神にたらぬ業とて　程己

旅の友老井

栃栗ものがたるかなしみ　雅のぶ　半面

いろ栗や落る音ちいさく　逝　苔花

後稲や先へ手をあてゝ　嘉川

千曳の月へかくんとする竈うま　許六

俳諧の波ゆる入いとゝ　惟然

訪隠者不遇

冷飯を柚味噌にする釜の煙　程己

まてよ客とゆかしく柚味噌ゆ　園女

寄地かる一人ゝゝや民の雅　波村

みしくし妻の菓や雅の姿　許六

謝芭翁被訪妙菴悦而曰交

十年もとゝ一ツもの雅　猿桃

行雁や卯月ゆ三布蕾園　義

句しゐ月ゆ追加

閏月

芭蕉翁の秋より餞別

五月雨も日と月のひとつ宮　月　ニト　石菊

さゝら波よりとゞめぬる宮ゆ　蓼太

衣配月や明光乃一りさま　古　立甫

餞乃手無閏乃咲や蓮さゝら　如元

三月も宜乃別れ宮さうゆ　水巴

俳諧つよりも七十五日也乃ち　ニト　仙春

大

暦日もるとり姫りゐ乃とうゆ　高白

文月乃三十日花とらく竹竜ゆ　比竹

小

御月ゆ二十九日乃大暦　日　ヒコヨ　孟什

朔日

新もと牧あつら秋なり　松　イセ　紫雪

月蝕

月蝕乃日ニ吟入や栗乃出　李由

月蝕

孤絃乃ふともうるむや月の蝕　汶村

月蝕の雲ゟあてます白牡丹　未雀

彼岸

百姓乃娘ゟおしろいひらん彼岸　許六

ふと之ゟ雲うちゟ出お彼岸ゟ　支考

きりぐすと蛇ゟ彼岸の棒ゟ彼　未雀

六月

おなじ月ゟ彼ゟ月ゟ入の人まとろ　牧江

八専

沈痛ゟ八専中や桃乃花　雉色

十方ゟ

てを星ゟる十方ゟ桃乃あつさゟ　毛流

庚申

庚申や雑ゟ火燵乃ある在家　湖東

甲子

中よりしぶきいでやう清の葉藤川　米窓

入事

胴龜形夜事と記を使いるを　錦芝

八十八夜

ふく病みしぶきるよ寒の名ぶり　千那

二百十日

葉大根よ二百十日の強雨の夜　雪曲

雨蛙

まるれ四壁葉れ雨きまる行と鳴　仲之

不知作者

不無一もまるよ都十蛙ぶいてぶり　素徳

あと至

門おの乃小雨も海そよ雨の夜

ねりて

おりこと解板宅きねのこと　徐子

寒々

月雲乃恩よ計とむ宅乃入　義

宅よ入おろよかるし夜芝猫　集徳

月前

大空はうつ波の中なる笑ひ哉　之甫

年内立春

としの内に春ハ来にけり梅の花　智月

立春

春立や歯朶にまとはる神矢の根　許六

跋

自幸此書天理の髄体窮めの源
民物説ハ人情の實を面白しやとし
讀よみてさかしき二書ハ東西許六の
鵬なる末若汝郎か見る雑漢の雲
形なる者としるへき也のなにともしれ
ぬ水ありしうしるし人一ゐ乃俳
諧の一撰に赫然として百工人の
望まも母しめし体かしるもの誌何　似宥

孟耶觀主頌

月澤衛尉　買年　李子由

五老井主人

武林　　森羽官　許子六

江戸四日市
古今珍書懇
蔵摩墨五一

勾塞

五老井記

許六選

慶應義塾藏書

風月飛來

霊泉あるはれりてゆるるの後よ尺あまりて三尺ばかり盈池する流れ出るの潺々潺々タリ五老井と名つく別墅ばかりきてゝ五老菴を作る主人姓ハ森名ハ許六こゝ五老井居士と潛す ゆゑ也 ゆゑ別号也驛の東不知川流れて多能の山南よりこゝ十町の休服を

ちうひ半月ばかり深山領をうろつき遥よりきく東
はるかの高嶺と坂西より流れ一めぐりめぐりて
重泉を出る波てはるかの白雲を岸の中より
そそめくとなく〳〵其水乃はきるを恵
山乃泉脈を通し一おまものこと仕肅別の金泉
よひとり立へるそれ数百数の巖ばかりて
まりいなは四の生涯をなかるかをつくしす
一とせの冬よりあて命を数よるそ暮をを
と寸雪山鳴る井盤ち細流あ上人の柳の

作も今は水よ伊流ゆるこ法要廣大より
て神仏のををすしめ見ッ竟の井ばかり禹ち
水をを夷しをもてすると印民れ杉さやうなる
しも後よ山あるさ栗の器とい時よを
みをよおして眺をきハまわなり御あの
高に南に小ち山のをうすまれ日我伊吹就
岩比良三上ち山よ眺をさく申酉の方よ
御の器あり聚風をるち伊ちより大上ち
を所をうれ杖を曳て八嶽を廻を器予

釜を薇を韮を芋を栗を若粥を炊く柳葉を挿を蓬を麻を敷て膝を寄め廣を六人一座ゑ金〻を茶碗ゑ杭五ツ筆墨の外ゑ物なしゑ杜字を添驛路の路字里程を合て始をかきしを尾ゑ筆にあてすゑ樹ゑ本鉾を入ゑ窓の外ゑ自ゑ竹ゑ物を穿て小柏の凡種を蒔ゑ色花草ゑを植ることゑ山蜥の石ゑ世ゑを高ゑ噴ゑ陶器ゑ文回ゑ

僻ゑ居ゑ二十余本李子膳芝猫を飼ゑし物ゑ果ゑ人ゑ貴賤を家て雪裡の芭蕉ゑ天ゑ物自然ゑ一味の風雅を愛ゑ世上ゑ年月を樂て予ゑ心気のたのしをゑ主ゑ事ゑ終ゑ上ゑ卿童乃ゑ石戯ゑ也ゑあゑそ山亜蕃ハ文雲を樂ゑ世ゑ物ゑを同ゑ一ゑ世ゑ やゑく家ゑを立ゑ事ゑ志ゑ後ゑ樹下ゑ流ゑ個ゑ すれゑも文ゑ答ゑ物

なし冊陳の多遊を間の蝶蝶のと集て
青色より脱つこを敷し五色の流より脚
を洗て巡る干岩元録五年壬申春弐
月於盤欒樹枝下勝毫
みすしれ尋ひて見れば称れ

文山村

和漢全書

元禄壬申冬
十月之日詩六亭具り

文山

そもそも人もまれ神仏毎
野を仕なる風雅乃あるゝ玉詩六
仙宴を奏む小粒の吃味て洒堂
汁乃煮しは秋の風もれ盛水
岩の月奥へ入て古蓋紫
もん工夫を風牧屋乃海や筆

ウ

方寸の乃侍宮中より賜まれて
焼焦(ヤキコガ)しし小蕪みぬ菊
粽つむ菴の葉をゆるさ云
渡殿(ワタイ)との母なるなら乃入口坐
はらふ宮殿を色人まち文ま葉
和歌のけて蜻の吟飽き れ
青雲をあしら神の文匿 菊
小まま萩乃色をよくもつ云
八月を詠面白き小脇物 書

焼山あし乃中形赤ケ 葉
寸紀す島も色の木陰まて 乃
はしも色まま鶴乃卵(クイ)ま 苔
まふく原毛名の笛美ちつしや 云
高度の巫と酒よ解すれ 寸
さはまと鏡一おまま葉て 葉
和名まし毛毛持の上 れ
竹乃教ちつ甲侍(ヤキ) 菊
山はしを毛山を生る春 云

児達を鮎の子焼ゆるされて　生
瓦月よかしよ舞台の世界　葉
ゆうべ歌舞伎をつくしすぎ　雲
琵琶をかくして出るかるた　籌
あるかな毘舎門堂の小方丈　仁
ウ　たのまつ狐やしろ　生
一さしもまてき柴のあき茶屋　葉
藤ゆとゆる笹折の坂　水
家長れしきすゆもまの仏　籌

菜摩ゆ一なむ百姓の家　六
むのまつ（て迫る神示家　堂
七十乃賀ひ為蓮華上　菜

卅唫

李由

難船や比良の山を小さく雪ぐもり　許六

蓮蕾の酒を秘まれし　汶邨

酒乃色は黄ばみて蕎麦の花　徐寅

京のゆくすゑ機嫌なほる

月ぐもり揚屋の灯のぬれ過ぐ　六

一城乃春花　屋　由

ウ

色ゑ侘びの子稲を束ねて　子村

女房の供ゑ吏乃ぶりうし　由

門口午化粧立ゑ宿の有　六

申ゑ午風月乃蓮四　之子

葉の葉のちりとなるる蓮

さんなん虎の小あ風小鹽

引飯乃美用ゑる男アな　六

扇で風ゑ風なの出かゑ　由

大坂ゑ未殘のやすき秋の夜て　寅

月夜を伐る奥の世の中　村
一あ〜先物の花咲きぬ　六
池の面芽吹き蛙なり　由
名
永禁日記十三篇より書こうと　村
思へ〜解て乱れをいはく　子
此見るとびとの草貸の家荒れ　由
迫〜くれのはく〜ち掃　六
仏城の内中一ぱいて　寅
上のおかる竜の掃よ多明ケ　之

掃ちきるわ庭よ拓を作りきて
うはつけて逆海塗乃丸
地茶の先口もしるほき和て　村
屋いの隙をもふかとつ　子
そよ〜と麻なれふ多自在　由
脚手技て むすよ 横梟 探　六
ノテ
半寸高庭 一枚 拓て 手 拭　寅
河手 少 あく 作法 海 乃　之
鮒よ はちくま 水の帰つれて　六

秋のまくずは袖をぬぐ角　由
はるゝ間ぞ人を恋ふる　村
菅も赤葉も頃くれる　色　寅

弐吟

賀波

秋もなを厚ぬり掛ぬ宮さ小
葉ぬ引そ〻ぬる屋敷後　許六
菅の月剪へ〻ぬ花季外て　利牛
何ゝも〻れすゝまい臭ゝる　坡
大勢の中て精出す　五〻　八
〻やい七ツ乃徒花　穿鑿　牛

葬れる傘を陳へ立てて　八
女房乃敵よ　一ツ　呑せや　六
餅屋をよつきれ紙ぞあてゑ　牛
かい山をうるる　書町の坂　坂
用心乃や孫の碓平　雪降て　六
玉子の殻れ多き掃溜　牛
何ぞも武神きた出るる　坂
日暮、商人の戻るまで　六
梅干鞘をひろ四ぞ心　牛

諸家さうしき乃芝土よ　八
さんくと身の夜の明る寺　六
無嫁遣おすす肌の宝寺　牛
狀さなハるわ茶屋もさハめきて　坂
茶入前乃三井の振舞　六
一ふりの面よ涼まず桂のそ　坂
女子たり手よがしまの出　六
煙掃の乃そまで意の所ハるし　八
ちやう浮ル町の考会　六

玄沼を傷を通つく奥まで　坡
だんだんとして会話集つく　六
旅人のもらひたうまは伊達として　八
けぶり　みゆ　日　れ　ら　り　六
素裸の稚の久しき月の代　坡
酔ひ　競ひる庶を逃せ　六
ウ
相原紙へれのもきかり　日
痺癖をうつるにこの修実　坡
無傷ゑ見やをもやの梅の中　六

立まりはてハ庚寅　掃きり　坡
一年ノ月　翁　油　冷込むも　蓋　六
涙をの雅るの　ひさる　彩　筆

三吟

越後屋のえらの鶏のさむさ小　木導
青の豆腐のかゝる　姐板　朱猶
毎年麻ばかりの春雑踏やりて　許六
きぬぎぬの後と　腰巾よまく　李
蕾切て　竹とかすまれ　腰よ　猶
寄場の上の丁目　也　六

ウ
ひはたちと曹洞宗の葬八海て　李
ゝれて又　茶　研もする　猶
天竺ものて下女化粧よりの紀り　亡
法おすゝれて　そうとむく　李
茶にくとよれ茶　入て茶漬食　猶
産業へ舞て上る　かる　地　六
敵の多　琥珀乃陳枝のたゝ　李
萩も新ゝ　法　法の有　猶
休ゝは陳そ　るれいゝ　まのて　六

漁村乃華小濱浜 浪槽 啓
蔵蓋の水口流寺ゑ也ゑ 油
沐生も芸て 夜ゑ浜濱 六
名
筒菜首平ゑ 啓
文井ゆゑに友堂乃友 油
よし女の子物を嗜ゑ魚て 六
前ゑ敏ゑ風ゑ 啓
此茅子戸板の上ゑ 油
まゑ 賢麦平 六

即蔵ゑ甲を脱て身を見る 啓
矢口のゑ平ゑ 油
奈粒ゑ 六
瞬ゑ乃 啓
精ゑ 油
解毒の穂を孫ゑ 六
珊瑚珠のゑ 啓
ゑどゑぞゑ 油
正月芸ゑ食ハ餅ゑ 六

依和山寺の菊咲ゆる　孝
七夕は紙くずを引出し　六
もくもくの陰つく年　油

三峯　仮邸

伏うの夢より吹きくられてそよの月
ほの原柳の一まんをもる　仲六
お撫さまの鈴をもとを吟ぶく　本導
ゐるのよりいよ上る御の恵　村
かしこさに伯父の法まで九めぐり　六
鈴するやうに年あの御ツカヒ　孝

ウ
いそうしゝ人をるも恋の一思葉　村
臨年　回うまゝ用ほれちの寄　六
尼ゝるる宵を偽年浅ひ　数　た
罪を氣跡くゝ考う重　文　邨
恋海の久世戸を鳴う野の声　六
又十るてそるゝねん魚　た
去冨民三ツ山ひゝゆる寒の内　ミ
まゝい重て年一月の澄きる　六
竹籠の果もちつく比花盆　た

白川名乃ゝをの雪けさ　村
むさゝ年を変れけ度の御解状　六
市　形　河　乃　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　た
各
まゝ餅ゝ日の寺ハ世来て　ミ
伊勢物の去れ物のれあき　六
除物年をの接花ゝやり　た
物でまゝる　城下　村
めつまゝと指し茶仕集て　六
むまゝ坡とあつゝえやる　た

きしはや大はまゝ人家
又ほゝ枯て人まる事
夕涼みゝ場(ニハ)もしる夜の月
掃除の法れ十柔の臭さ
仏成の出尊人うきぶ茅原
小俗ゝ母子人つとゝの立
食徒平蓋大根を打曲て
師走よりきゝ夫郎の業取り
冰地を敷て焼ゝ気の内

乙
六
左
村
六
左
邸
六
左

去年乃夢の表はなし
なし所れ垢塵(ホコリ)の未そ也
つけ木の帳るゝ風遠せ

乙
左
六

三吟

毛紙

旅宿を定めぬき岩よ名牡丹　茅舎
細ふ流れ寺のくれ　程己
西月乃宮代の飛小夜文て　許六
秋もやうく湯屋の月　之
蓮のむ金成るくて遠ひろう　洒
稲むしの風よ　大夏　百姓

ウ

ひとつと腹痛まいれて　六
武士の子の手枕るう休まれ　己
あるあれきの原や雉乃巣のまし　丸
よい寺みちる茅原乃山　京
月雪まれつも八百屋の仏来　乙
冬ニ年ノ中より如房之人　六
まこの取方はなる庭を　之
酒しるくこで世まもすむ　丸
むの屋　神前流乃　旅　拙　六

一本薄に須々しろきあり　已

名

山しれぬ身に六尺をまき直し　玩

戸枝年月の猪をとらまく　壺

頃節子きて吹上尺膝して　已

わばかり風仏なりの勝口　六

しやくしもやはもなる丸のれ　壺

只身代八まかの間男　九

傾城乃此女子なるもあれ世　六

脈かよふて　蔦もむすびす　巳

まみなる下弦乃月のあかるさ　玩

松茸拾ひ雲尾補の山　烝

峯入乃遠み宗派の替りて　已

即非のトで禅半かさなて　六

果さみやつれ果て風峯白集　壺

着脱もされてみそまかる免　九

ウ

一時物紙にかす　炭俵　六

晩まで通す座と場のある　已

かしくしく京宣の上弁月のさして　玩

寺僧此乃判を乞事
よいもしたや指く寺院と
家の中よりひすの声　六

二　詮

詮六

寺僧乃脇差を清水毛乃ふ
日　向よ照てる新乃陽を　寺田
奉公ゝり生涯をおれをハ立て　同
中でゝてゝる屋根の雪ゝ　六
月の秋ゝゝ所の地面　同
腹のゝくれ迷ゆれ　也

ウ上下で這うむしの縋まつ　由
死しらしの布、洗、晒し　六
ちやつちと泥の解まるまて　由
験気を抜はなる張高い　八
恨貪欲女房の乳を化粧て　巾
鳥帽子て称宜の出入する　八
まるまるの茅山乃喜あ　由
気をつけて入れ小乃十四夜　六
地獄のまゝ寝不も寝まゝ　巾

華扇蔵天て江戸の乳を　六
まるくとたれの市の四つ辻ろ　由
嫁うまゝにて名ゆくろ　六
白い地出れ拍掛くまの蓋　日
牛うはくてよゝむ坂　由
上体乃衣なるれ茅羅　六
ひまつと鉢され　婆　間　四
はうくと亜房の布よ湯気て　六
見ずなゝ　妾　奉　公　由

[illegible]の[illegible]ひ迫せたれみ　六
はた[illegible]て　世[illegible]寿[illegible]る　由
[illegible]の下より[illegible]い　入　仁
棚〳〵物の[illegible]　廿
[illegible]の中より[illegible]の月　六
[illegible]の[illegible]代[illegible]　由
ウ
[illegible]の二寿手[illegible]る和[illegible]葉　月
四今[illegible]の[illegible]　六
[illegible]の[illegible]の代より[illegible]　廿

[illegible]りて通る刻乃　百方　六
竈(クド)の[illegible]の[illegible]　由
[illegible]ふ[illegible]て[illegible]の[illegible]　六

七師三回忌　報恩

許六

月雪さま〳〵に孤し孤るゝ
小まつの陰はれまさりし　李由
雲書ゆのわたしの寒さ哀て　太導
故反同志の席用さやく　朱拓
懐のふくれて一殺る生ゆ　汶邨
きゝ取丁(カニギ)蕎を人は押るゝ　馬佛

ウ
京くしまの烟とそる揚や町　来雲
松めつゝうゝ初るひとめせ　胡布
数のゝ子ゝ招き牛方は小立紀　毛既
夫月　奥あゝ賢之の家宅　程巳
人岩の松ハ　やそ城の塚　徐寅
外命　笑平　荷て先へやる　六
京屋を取てまゝ服ゝ　由
松を使ゝて　拔家ゝ　尊
秋の月ゝ村中こぞる　茶ひ祭　油

ms はゝ出てあゝ蕎麦の花
自然で花人えゝ人えゝ
一歩もゝ歩て長崎しまり
二
雪降て寺佛の御洗濯
蕎麦畑蕎麦畑細長の関
俳板のひゝく濡るゝ門前
味噌焼門と松まつ
かゝ肉の輝よ強く高
るゝ紛れて春雨吟ふ

村佛寒布孤已子六由

いひたやす強の食べて行
早夏あゝむ並伝の
思い茶女の仕ゝ
地宮の所のゝ
強元よぶんと
求る材木でかゝ
ゝ人並大義
日そ赤ゝ出て
なゝ祇の祇

尾独村佛寒布丸已子

門の外よりおろしと車の音や花見ん　大佛　六由

そ衣更ゑの袂の境涼　業

辞世

月ハ撲千鳥ハ哭やし雪佛　馬佛

悼馬佛

茲ハ丙子春九月廿二日六成堂の馬佛例の翁血をそそぎ涙を注て孫ハ眉まろ毛ハ六年ハ多病ハ毎年吟席を欠ぎ士ハ三夜の迎火ハ一軸を送れ一生を以て自ら病ハ佛し我ハ今ハあれと亡師三回忌の遠忌歌因の席まて送ぶ花見ハ人いそ〳〵やもしといひおす白もくふ蕊むしとなるね蒼くすとゝきものくふの気を白千鳥と花鳥をあ〳〵そひ為ハ眠を利貞子ゑもゝれいとつゝよ鳥の脚を肥す嘆くゝ凡雅の庁脱をれとされ年下月おの遊ひよ多く一人を欠ゑ千悔万悔の越涙哉

〳〵霊あるまそ〳〵きあ姿を追悼〳〵て
断金のちをりを謝すのこ　杜由

千鮭もさけれ元の敬れ添
河田てを河とおくるなる　謝逢

乃中の味噌よこもり〳〵ね旅よて　許氏

月猶の酒さる月のかるふれ　朱紬

引の西まぬけて出る一をとを　本尊

〳〵す榜のまる杖の和尚　程巳

卿を小子九俗ま出屋町　皮村

西大名乃こ〳〵ら付く　徐実

皇まを也て嗅て回れる紙の箱　毛孔

条の順を吹ひの蝿　茶壺

放示の証之はまれた出のる　執筆

奏肖記行并　師友之餞別

許六離別詞

去年の秋うゑあるを風ぜあるを小一日
は神垂ゆるあるを知るべしむもとれみ乃そみて
りうしんまを解しもいて後日宗匠をまねき
筆墨紙を乞ひ発句をおもひこころみよとふる
あるを夏たゆの高たゆ風雅のたゆをいへる
風雅を仏の高おもてやいへるとやいへるを
ふるふる三月一日一夜宗匠は

こゝに君よ八月の秋を知れて品ゆゑは
ゆゑて用一なるゆゑ風流も書ハとなれ
予が師し風流ハ花にして予が筆をして
さ花を彩る書ハ精神微を入る物ぬを
ぬるよ真を画をるゆゑ所予の天風ゆるあり
予が風流を蓑炉の夏のごとし元よ
ゆて用ふるゆゑし新ゆゑ新のごとく
のごとうゑ次よ云ちうを花あるゆゑ
ぬまゆゑもあれちるゆゑ花ゆゑ

のこりきるのしらのみもこまてらに新こ寄
ありてだにもはてしひとろねるとのくまひ迄
しやうれさこのこと成力小くして世間
一家はかりしなるるなれれ
古人の作ともし今言人めあ面白
をもしのよして南山大師の一首落た
まへてしら風雅文人これを用ひ給て
燈とうもてはせつ此歌を遠りて
とあるこのこと

元禄六孟春　風羅坊芭蕉述

風羅
風尾

おもてくる月六日の風流しなしよ
はうつくるみ　おくるき例の作くの案
を使としてにはの新八郎もまた名酒
を携てきたる文なるよ井しと忘守
義城の作よりまちやくるを面白しるを

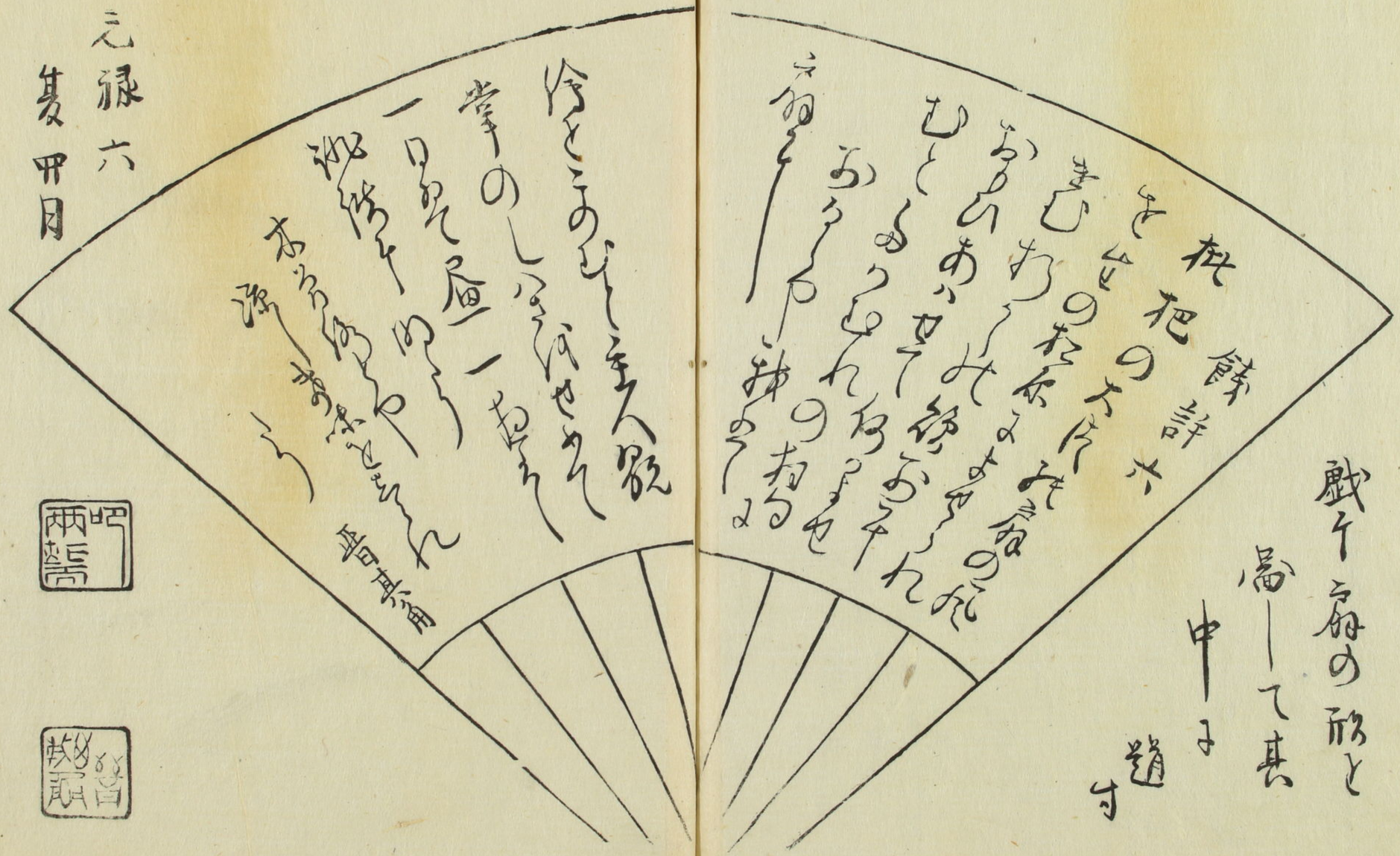
まして平秋の上のあつする人は必に尽する
たけみられし山白やかに見してたまはゞ
能天論語の君もさ也まり稱
別の情あさからずして三夜句をを
れし拙き一ツのきしめたり見れて詞
をそへてもたまはんことはかけとあれ
しり予後風雅の為に餞別あり

某伺

木曽路を経て旧里に帰人は森川氏許六
と云ふ古しへより風雅の情ある人〻ハ後に笈を
かけ草鞋に足をいため破笠に霜露をいとふ
てをのれが心をせめて物の実をしる事をよ
ろこへりと住居おほやけの為には長剣を腰
にはさみ乗掛の後に鑓をもたせ黒の羽
織のすそは風にひるがへ
し風あるさまは人のありさまにおかす

椎のもぬけ　似よ本名の孫さぶ
さよ人の說まうくるくあるの說　同
あるいは　ぬ　今滅法の形見よねうちうるくあ
餞別
笠程や蓋月さらしあやの笠　松風
春雨に濡れさらなる田ぶ　桃隣
東武流　　月雪さよ　百里

本名山あの孫のもぬけ　屋号郷名
のしまけよ　草氏
牧のあきをえ　才牧
あるあるあ　安氏　孟退
ふたりふるの　田氏　奚魚
甲斐の　門氏　陳曲
丘の法を　隣郭
不二ぶ中よ　日鮮
似よ蓋一　桧氏
あるの　前氏　連化
あ山の形　ぬ


元禄六
夏四月

奇紀とも名れん物なり乃
湖鶴今ゝ去年暑

甲路記行

又十五のり脚より一路の路もうゝ〳〵ゆ上人
独の上を嶺氏八列の逆旅を号不平れ上
乃流沢也台人八号なるも拠るも其の風
形の境をおすして方古の情を述るり為也
此の客となるゝ二十年あるゝ八不佐法光
の的月を殺とあを土岸のをよ旅をあれ
るゝ水ひ又むさ〳〵ひじは系代仰て雄沙乃
をとまるに八本名の為を入る巳ニ六なま

乃ち東西南北より奉をする事合て十一度
也る程に郡本氏より不のきゝすひおはた
たハまのあらうまにぬ以名誠にすたた
ハ甲斐の猿橋を除て上の波所まうるを又
もや広き川なれゆゑきよ桂をよむと好
下ふちをの紀則を拔きて久不の未歌た
戯場の由事をもめて旅りの表より收めく
袋をきれ仮を袖ひ千枝の名とおりて
松のよかをとらふむつゝきゝ為より則を

則未笑来飛く心地きゝ分りそよ男絶れ
一巻ゝも見きるゝ寸月流名帰しやゝ市よ
行人の見者ハ已よ首途をすゝ為のれ又月
六日武れ乃鈴を退

印のもしよ名色の馬れ名以

日をの又者ハをゝ為る紀則よゆゝて名をそ
む松久不れ為ゝ名のの名れおりくをおゝをの
条よ為れをれをもゝ寸之ハ為れと説
の名れおりまれあつゝ為れよ賦れり

旅すく谷のなくさめよ半あつめて春あへ
おくらしてよりれん七帥のうこんれ一巻
ゆ[illegible]れを芸す

田植歌の説の賦　春小序

旅れ田植のむれ雅ハ遠あり乃説西明家
我の尺ハ一ハ皆ハ能の様也家白川
乃田植ハと学和ち奥羽の百姓四ち言歌
社交ハよ長代ちを歌しあつ[illegible]の人

すみよハ吹浦をよう人伝ハ様ハ天
の川よ和歌社を歌ち始れち路乃
二尺を成て七百三十余程をすり寄れち
為整代乃を成一弥の歌をうて
田流を直さる日ハ[illegible]歌を設き面
の雑伝ハ為ハ時ハ旅中ハの様をて
を伝して伝ハ京ハ求ハ有ハ[illegible]田
様ハたち伝伝をあつめ相賦又殿と
ゆ[illegible]ハ奥の田人乃田植の類ハ和寺

旅宿のさま上段より書院座敷設すし
火のもさ火鉢よやくてけて門口の入口相
傾て居ふうこと小形のさいるハ夜への設
ものよりし出安乃堅治ハ長枕を立て
根ゐ枕箱ハ落て隅くまて畳をて
天井姫すまハ面もとよきハつき所行対ハ
ちの紙ハ帝戸の心こと事ハ無しう
治賣市義賣ハせうゆれやしくハ枕を傾
市ひき宿入られハるさ北参ハ書紙

なる出ちハちと云ゆく矢るハ旅人も亭
ものもよく寝て夜の明てふうくはしも
ハ久一

大名乃寝間も稀ゐ言さか
乃乃の上ハいくく私訳の胸ハてとを
加ゐ能迎しをきく馬さことはこと会一僕
の作ハさ所を稀ゐまり鶴の写ねて一れ
れ男を記し枕絶ゐ何て長乃を引を
ゐ稀のやうはし入ゐの一番ハ入ゐ所ハ

何の為ぞや はくの枕紫に西のたへしく
といふおかし

世話書の夜ふあきし旅の夢を
いはも此情にかなへり
ゆんの君からに飴酒のあき雨もなし柳汁
詩の餅を吟じは東坡玉の弟をもてる
きめぬかると以て下天をも吹きし麺をと
すむるは手段の茶屋饂飩の馬かくと
見しきは凡俗の基也玉子は煮ぬきぞ

木兎の籠ら風紙は行あんさみ跡の肴板は
筒とけるに毘羅の田楽を何恙乃
吟れもうせ

案息ふまての室揖也や守はの山
舟川の上一る繋の猶たはしかたへさ
しみ月の太郎まかり僧の子供に書入れ
おのゝ州の戸を流されし角なけの僧跡を
御して立りしれ且代はくしのは嶋の合会
の賊也あの阿深を何み川と申し伝え

大きなる酒盃に熟の中乃流ハる人を
をそれまとよ茶ゐる人ハ股ゝけ入て茶を
廣ゝけてまらあゝる者ハ頭れなし
て舟ゐる立ッ身ゝ水ッ波をうゝ風ハ強
場の情也百姓ハ輕重子月月
とおゝり一盃の酒ハ後世の氣をやー
ゐ一生と添て離ゝとすゐして中分の
男ハ茶ゐ女ハ茶の日云々のあり
ゐ板の木の下ハ脇て蝶の飛ハゐる孤

小欲淡を生ずるハ孤ゝけて出す
百月の金ハ仏ハれ小仏ハ生ゝ
吸ゝハの裏ゐゝき海ハ耳の完平
細の金ハゐんとゝハ山ハ一ゝ勢の名物
も言て世ハある人のゝ月日を
出野の手ゝ定めゝ月日を
おゝる人ハ仏ゝ風ハ世をやゝ

出女ハ生ゝ都ゝの者
流宿源伯のゝ中あれゐゐて

おなじ様なるよハ者をかしてゐ同しこと
二夜ハとりすゑ月毎に礼氣霊の夕暮
は情ふかきあるーして歩行臭き衣を
てめれら物を焼大よあがるなるハ三方
荒神とゐ物をとりつゝまりて立りれ居く
を体むれた物めの礼場より追かゝさ
れて却てのゝ人をまり股をすくめも
方のあるを杖を持て歩むへしとも尺しす
人間病死のゝ来ぬ時も不ものます

腎臓のたすけハとゝ懐中の振茶ハやしく
ゐ病を防く巡礼五郎の族ハ酒肉を
倒れ外大片月ある所寅を追ゝそれた
俗の聖ゝて門下ま入られとろへるれ孤
ま美泉の下ま訪くるて何ゐのまゝ
訪りをゝ〳〵すゝたゝ星ゝ生ゝまゝめて物の
数い衣類の掉紙とハれまゝるゝれて何
ゐのいゝある人とゐふゝもとゝすゝ切也
器アの辻堂の笠ま絵文をまゝて同行の

別を惜む隅田川の気仙を弱て七夕の古墳
を登る今東京旅の人旅懐の情をたゝして
凡枕の腸をさゝす能用八白川の何を
よみて二条院讃岐不二恋の三
句を求てすゝやかに星を海る赤八点宝
を人也赤海の一すゝを持ぬ人凡箱を
おぼつかなしといひし箱の夢年を
重ね小さくまれ

千皆元禄九年丙子冬臘月日桃

風狂堂選之

五老井主人

武林　木兮羽官　詩子六

孟郎觀主頭

月澤獺人　買弇僧李田

京寺町二条上ル町

井筒屋庄兵衛板